

## ● 研究ノート

# 日米の保育者は日本の幼稚園 Web サイトを どう見るのか?

—「こどものつぶやき」をめぐる語りに潜在する社会・文化的習慣や認識—

中坪史典 (広島大学大学院教育学研究科准教授) 秋田喜代美 (東京大学大学院教育学研究科教授)

砂上史子 (千葉大学教育学部教授) 高木恭子 (ソニー教育財団主査)

辻谷真知子 (白梅学園大学/日本学術振興会特別研究員 (PD)) 箕輪潤子 (武蔵野大学教育学部准教授)

## 要約

和文要旨: 本研究の目的は、日本の A 幼稚園の Web サイトを米国の保育者はどう見るのか、日本の保育者は米国の保育者の見方にどう反応するのかを検討することを通して、日米の保育者に潜在する社会・文化的習慣や認識の一端を明らかにすることである。研究方法は、次の通りである。(1) A 幼稚園の Web サイト「こどものつぶやき」を米国の保育者に閲覧してもらい自由に語り合ってもらった。(2) 「こどものつぶやき」を作成した A 幼稚園長に米国の保育者の解釈について意見を述べてもらった。(3) 日本の保育者に「こどものつぶやき」を閲覧してもらい自由に語り合ってもらった。研究の結果、以下が明らかになった。(1) 米国の保育者は、A 幼稚園が「こどものつぶやき」の背後にどのような思考や学びがあるかが解説されないことに違和感を持っていた。(2) A 幼稚園長は、一般閲覧者を意識して「こどものつぶやき」を発信していた。(3) 日本の保育者は、「こどものつぶやき」の背後の思考や学びをあえて解説しないことが重要であると捉えていた。こうした日米の保育者の認識の相違は、彼(女)らの社会・文化的習慣と関連していることが考えられる。

キーワード: 日本、米国、保育者、幼稚園 Web サイト、社会・文化的習慣

## 問題と目的

近年、国内外を問わず幼稚園 Web サイトの開設が増加している。背景には、未就園児の保護者が保育施設を選択に際して情報を得る、在園児の保護者が園での我が子の様子を理解する、保育者養成大学・短期大学・専門学校の学生が就職活動のための情報を集めるなど、閲覧する側のニーズが高まっていることが考えられる。閲覧時に使用するデバイスについても、自宅のパソコンだけでなく、スマートフォンやタブレット端末が多く用いられることから分かる通り(総務省 2015)、私たちの生活は、いつでもどこからでも Web 上の情報にアクセスする行為が日常的に浸透している。

こうした中、情報の送り手である幼稚園の状況について幾つかの先行研究が示されている。例えば、松田(1997)は、幼稚園 Web サイトは誰でも閲覧可能であることから、在園児の保護者との情報共有だけでなく、一般の大人に対して子どもの姿を伝えることが期待されると述べている。堀田・堀田・石塚・高橋(2006)は、全国 620 の幼稚園 Web サイトを対象に掲載内容の特徴を分析する。その結果、日常の子どもの活動や作品、年中行事における子どもの姿などを伝える内容が全体の 76% を占めることを明らかにする。辻谷・秋田・砂上・高木・中坪・箕輪(2017)は、15 の私立幼稚園 Web

サイトを対象に記述スタイル(どのような内容をいかに伝えているのか)を分析する。その結果、幼稚園 Web サイトの特徴として、教育目的や理念、園環境、カリキュラム、年間行事予定、一日のスケジュールなどを記した「常設項目」と、保育活動の様子、保育中のエピソード、日常の子どものつぶやきなどを紹介し、定期的に更新する「更新項目」で構成される場合が多いこと、これらは保育の内容を伝える基本情報に加えて、子どもの様子、保育者の意図や振り返りなどが写真とともに記されたり、書き手の立ち位置が子どもや保育者の視点から書かれたりなど、園によって特徴があることを明らかにする。先行研究は、米国でも散見される。例えば、Wassom(2002)は、未就園児の保護者獲得のための Web サイトを用いた効果的マーケティングの在り方を、Schleig(2012)は、園と保護者のコミュニケーションを円滑にするための Web サイトの効果的デザインの在り方をそれぞれ検討する。また、Web 上のリソースを用いて保育者の専門性発達を企図する研究(Sawyer & Myers 2018)も報告されている。このように幼稚園 Web サイトは、多様な情報を発信する媒体であることから、保護者、地域、一般社会と幼稚園をつなぐコミュニケーション・システムとしての発展が期待される。

ところで、文化人類学や比較教育学領域では、普

段当たり前に行われる幼児教育について、知らず知らずのうちにその国の社会・文化的習慣の影響を受けていることが指摘されている。例えば、Holloway (2000) は、日本の子どもたちが一斉に挨拶する儀式や所作について、米国の保育者がそれを好意的に受け止めることは少なく、集団主義的であり、まるで小さなロボットのようなだと述べることを報告する。Burke & Duncan (2015) は、子どもと一緒に遊ぶ日本の保育者の映像を視聴したニュージーランドの保育者は、もっと厳格さを兼ね備えた存在として彼(女)らの前に立つべきだと述べることを報告する。Tobin, Hush & Karasawa (2009) は、子ども同士の喧嘩の映像を視聴した日本の保育者は、自分で間違いが分かるまで待つことが大切だと述べるが、米国や中国では、そうした行為は保育者の責任を果たしていないと受け取られることを報告する。このように、ある国で当然の出来事は、外国では当然でないのであり(唐澤・林・松本・向田・トビン・朱 2006)、幼児教育の実践はその国の社会・文化的習慣と結び付いている。

幼稚園 Web サイトをめぐることも同様のことが考えられる。例えば、教育目的や理念、園環境、カリキュラムなどを記した「常設項目」は外国でも見られるが、米国の場合、基本情報の一つとして保育者の学歴や学位が顔写真とともに記されたり、アンチバイアス・カリキュラムの方針が示されたりすることも少なくない。このように幼稚園 Web サイトを通して伝えられる内容もまた、情報の送りの価値観が含まれていることから、社会・文化的習慣の影響を受けていることが考えられる。そして日本の幼稚園 Web サイトを閲覧したときに抱く外国の保育者の認識もまた、彼(女)らの社会・文化的経験から獲得されたものであると考えられる。この点を踏まえるとき、幼稚園 Web サイトを文化人類学や比較教育学の視点から検討する余地は十分にあるものの、従来の先行研究は、いずれもその国の文脈の中での吟味に留まっている。

本研究の目的は、日本の幼稚園 Web サイトを米国の保育者はどう見るのか、日本の保育者はそれをどう認識し、米国の保育者の見方にどう反応するのかを検討することで、日米の保育者に潜在する社会・文化的習慣や認識(社会・文化的経験から獲得された習わしやものの見方)の一端を明らかにすることである。本研究が米国の保育者に注目することで、蓄積されてきた日米の幼児教育に関する比較研究(e.g. Holloway 2000; Tobin, Hush & Karasawa 2009)の知見に新たな議論を加えることができると考える。

## 対象と方法

本研究では、Multi-vocal Visual Ethnography (Tobin 1989) の研究方法論を援用した。(1) 日本の幼稚園

Web サイトを米国の保育者に閲覧してもらい、彼(女)らにとってあまり馴染みのないような Web ページをキュー(刺激媒体)として自由に語り合ってもらった。(2) その Web ページを作成した当該園(A 幼稚園)の園長に作成の意図や、米国の保育者の解釈について意見を述べてもらった。(3) その Web ページを A 幼稚園とは異なる日本の保育者に閲覧してもらい、自由に語り合ってもらった。

本研究が使用する幼稚園 Web サイトは、A 幼稚園が「更新項目」(辻谷ら 2017)として情報を発信する「こどものつぶやき」である(具体的内容は後述する)。これは米国の保育施設の Web サイトでは見ることのない特徴的事例である。Tobin, Hush & Karasawa (2009) が保育者の感情を喚起するような映像を用いたように、本研究においても特徴的事例が米国の保育者の語りを誘発し、日米の社会・文化的習慣や認識を検討する上で有益であると考えた。A 幼稚園は、自発的活動としての遊びを重視した実践を行っており、「こどものつぶやき」は、園や家庭などで発せられた子どもの発話を紹介したものである。

本研究の実施手順は、次の通りである。(1) 2016 年 9 月～2017 年 2 月、ミネソタ州ミネアポリスの保育者 6 名、テネシー州メンフィスの保育者 5 名、マサチューセッツ州ボストンの保育者 6 名、計 17 名の調査協力のもと、A 幼稚園の「こどものつぶやき」を閲覧してもらい、「この Web ページについて自由に意見交換して下さい」と教示した。各地域の保育者はいずれも同一園の同僚であり、調査は園単位でフォーカス・グループ・インタビュー(Focus Group Interview)で行った。但し、ボストンの保育者は、6 名が同一時間に集うことができなかったためペアで 3 回に分けて行った。米国での調査実施に際しては、IRB (Institutional Review Board) 審査を受けた。(2) 2017 年 3 月、A 幼稚園長に「こどものつぶやき」に込めた意図を語ってもらうとともに、米国の保育者の語りを紹介し、それに対する意見を述べてもらった。(3) A 幼稚園とは異なる地域の日本の保育者 4 名の調査協力のもと、A 幼稚園の「こどものつぶやき」を閲覧してもらい、「この Web ページについて自由に意見交換してください」と教示した。4 名の保育者は、地方自治体の同一組織(幼児教育センター)に所属する同僚であり、調査は同センターにおいてフォーカス・グループ・インタビューで行った。日本での調査実施に際しては、調査協力者に調査内容を説明した上で同意を得た。収集したインタビュー・データの分析を通して、日米の保育者がまるで対話しているかのような多声的テキストの生成を試みた。

本研究は、一つの幼稚園 Web サイトの素材をめぐる語りであり、その例でもって日本の多様性を代表すると述べることはできない。但しそれは、たとえ何

## ● 研究ノート

# 日米の保育者は日本の幼稚園 Web サイトを どう見るのか？

—「こどものつぶやき」をめぐる語りに潜在する社会・文化的習慣や認識—

中坪史典 (広島大学大学院教育学研究科准教授) 秋田喜代美 (東京大学大学院教育学研究科教授)

砂上史子 (千葉大学教育学部教授) 高木恭子 (ソニー教育財団主査)

辻谷真知子 (白梅学園大学/日本学術振興会特別研究員 (PD)) 箕輪潤子 (武蔵野大学教育学部准教授)

## 要約

和文要旨：本研究の目的は、日本の A 幼稚園の Web サイトを米国の保育者はどう見るのか、日本の保育者は米国の保育者の見方にどう反応するのかを検討することを通して、日米の保育者に潜在する社会・文化的習慣や認識の一端を明らかにすることである。研究方法は、次の通りである。(1) A 幼稚園の Web サイト「こどものつぶやき」を米国の保育者に閲覧してもらい自由に語り合ってもらった。(2) 「こどものつぶやき」を作成した A 幼稚園長に米国の保育者の解釈について意見を述べてもらった。(3) 日本の保育者に「こどものつぶやき」を閲覧してもらい自由に語り合ってもらった。研究の結果、以下が明らかになった。(1) 米国の保育者は、A 幼稚園が「こどものつぶやき」の背後にどのような思考や学びがあるかが解説されないことに違和感を持っていた。(2) A 幼稚園長は、一般閲覧者を意識して「こどものつぶやき」を発信していた。(3) 日本の保育者は、「こどものつぶやき」の背後の思考や学びをあえて解説しないことが重要であると捉えていた。こうした日米の保育者の認識の相違は、彼(女)らの社会・文化的習慣と関連していることが考えられる。

キーワード：日本、米国、保育者、幼稚園 Web サイト、社会・文化的習慣

## 問題と目的

近年、国内外を問わず幼稚園 Web サイトの開設が増加している。背景には、未就園児の保護者が保育施設の選択に際して情報を得る、在園児の保護者が園での我が子の様子を理解する、保育者養成大学・短期大学・専門学校の学生が就職活動のための情報を集めるなど、閲覧する側のニーズが高まっていることが考えられる。閲覧時に使用するデバイスについても、自宅のパソコンだけでなく、スマートフォンやタブレット端末が多く用いられることから分かる通り(総務省 2015)、私たちの生活は、いつでもどこからでも Web 上の情報にアクセスする行為が日常的に浸透している。

こうした中、情報の送り手である幼稚園の状況について幾つかの先行研究が示されている。例えば、松田(1997)は、幼稚園 Web サイトは誰でも閲覧可能であることから、在園児の保護者との情報共有だけでなく、一般の大人に対して子どもの姿を伝えることが期待されると述べている。堀田・堀田・石塚・高橋(2006)は、全国 620 の幼稚園 Web サイトを対象に掲載内容の特徴を分析する。その結果、日常の子どもの活動や作品、年中行事における子どもの姿などを伝える内容が全体の 76% を占めることを明らかにする。辻谷・秋田・砂上・高木・中坪・箕輪(2017)は、15 の私立幼稚園 Web

サイトを対象に記述スタイル(どのような内容をいかに伝えているのか)を分析する。その結果、幼稚園 Web サイトの特徴として、教育目的や理念、園環境、カリキュラム、年間行事予定、一日のスケジュールなどを記した「常設項目」と、保育活動の様子、保育中のエピソード、日常の子どものつぶやきなどを紹介し、定期的に更新する「更新項目」で構成される場合が多いこと、これらは保育の内容を伝える基本情報に加えて、子どもの様子、保育者の意図や振り返りなどが写真とともに記されたり、書き手の立ち位置が子どもや保育者の視点から書かれたりなど、園によって特徴があることを明らかにする。先行研究は、米国でも散見される。例えば、Wassom(2002)は、未就園児の保護者獲得のための Web サイトを用いた効果的マーケティングの在り方を、Schleig(2012)は、園と保護者のコミュニケーションを円滑にするための Web サイトの効果的デザインの在り方をそれぞれ検討する。また、Web 上のリソースを用いて保育者の専門性発達を企図する研究(Sawyer & Myers 2018)も報告されている。このように幼稚園 Web サイトは、多様な情報を発信する媒体であることから、保護者、地域、一般社会と幼稚園をつなぐコミュニケーション・システムとしての発展が期待される。

ところで、文化人類学や比較教育学領域では、普

段当たり前に行われる幼児教育について、知らず知らずのうちにその国の社会・文化的習慣の影響を受けていることが指摘されている。例えば、Holloway (2000) は、日本の子どもたちが一斉に挨拶する儀式や所作について、米国の保育者がそれを好意的に受け止めることは少なく、集団主義的であり、まるで小さなロボットのようなだと述べることを報告する。Burke & Duncan (2015) は、子どもと一緒に遊ぶ日本の保育者の映像を視聴したニュージーランドの保育者は、もっと厳格さを兼ね備えた存在として彼(女)らの前に立つべきだと述べることを報告する。Tobin, Hush & Karasawa (2009) は、子ども同士の喧嘩の映像を視聴した日本の保育者は、自分で間違いが分かるまで待つことが大切だと述べるが、米国や中国では、そうした行為は保育者の責任を果たしていないと受け取られることを報告する。このように、ある国で当然の出来事は、外国では当然でないのであり(唐澤・林・松本・向田・トビン・朱 2006)、幼児教育の実践はその国の社会・文化的習慣と結び付いている。

幼稚園 Web サイトをめぐることも同様のことが考えられる。例えば、教育目的や理念、園環境、カリキュラムなどを記した「常設項目」は外国でも見られるが、米国の場合、基本情報の一つとして保育者の学歴や学位が顔写真とともに記されたり、アンチバイアス・カリキュラムの方針が示されたりすることも少なくない。このように幼稚園 Web サイトを通して伝えられる内容もまた、情報の送りの価値観が含まれていることから、社会・文化的習慣の影響を受けていることが考えられる。そして日本の幼稚園 Web サイトを閲覧したときに抱く外国の保育者の認識もまた、彼(女)らの社会・文化的経験から獲得されたものであると考えられる。この点を踏まえるとき、幼稚園 Web サイトを文化人類学や比較教育学の視点から検討する余地は十分にあるものの、従来の先行研究は、いずれもその国の文脈の中での吟味に留まっている。

本研究の目的は、日本の幼稚園 Web サイトを米国の保育者はどう見るのか、日本の保育者はそれをどう認識し、米国の保育者の見方にどう反応するのかを検討することで、日米の保育者に潜在する社会・文化的習慣や認識(社会・文化的経験から獲得された習わしやものの見方)の一端を明らかにすることである。本研究が米国の保育者に注目することで、蓄積されてきた日米の幼児教育に関する比較研究(e.g. Holloway 2000; Tobin, Hush & Karasawa 2009)の知見に新たな議論を加えることができると考える。

## 対象と方法

本研究では、Multi-vocal Visual Ethnography (Tobin 1989) の研究方法論を援用した。(1) 日本の幼稚園

Web サイトを米国の保育者に閲覧してもらい、彼(女)らにとってあまり馴染みのないような Web ページをキュー(刺激媒体)として自由に語り合ってもらった。(2) その Web ページを作成した当該園(A幼稚園)の園長に作成の意図や、米国の保育者の解釈について意見を述べてもらった。(3) その Web ページを A 幼稚園とは異なる日本の保育者に閲覧してもらい、自由に語り合ってもらった。

本研究が使用する幼稚園 Web サイトは、A 幼稚園が「更新項目」(辻谷ら 2017)として情報を発信する「こどものつぶやき」である(具体的内容は後述する)。これは米国の保育施設の Web サイトでは見ることのない特徴的事例である。Tobin, Hush & Karasawa (2009) が保育者の感情を喚起するような映像を用いたように、本研究においても特徴的事例が米国の保育者の語りを誘発し、日米の社会・文化的習慣や認識を検討する上で有益であると考えた。A 幼稚園は、自発的活動としての遊びを重視した実践を行っており、「こどものつぶやき」は、園や家庭などで発せられた子どもの発話を紹介したものである。

本研究の実施手順は、次の通りである。(1) 2016 年 9 月～2017 年 2 月、ミネソタ州ミネアポリスの保育者 6 名、テネシー州メンフィスの保育者 5 名、マサチューセッツ州ボストンの保育者 6 名、計 17 名の調査協力のもと、A 幼稚園の「こどものつぶやき」を閲覧してもらい、「この Web ページについて自由に意見交換して下さい」と教示した。各地域の保育者はいずれも同一園の同僚であり、調査は園単位でフォーカス・グループ・インタビュー(Focus Group Interview)で行った。但し、ボストンの保育者は、6 名が同一時間に集うことができなかったためペアで 3 回に分けて行った。米国での調査実施に際しては、IRB (Institutional Review Board) 審査を受けた。(2) 2017 年 3 月、A 幼稚園長に「こどものつぶやき」に込めた意図を語ってもらうとともに、米国の保育者の語りを紹介し、それに対する意見を述べてもらった。(3) A 幼稚園とは異なる地域の日本の保育者 4 名の調査協力のもと、A 幼稚園の「こどものつぶやき」を閲覧してもらい、「この Web ページについて自由に意見交換してください」と教示した。4 名の保育者は、地方自治体の同一組織(幼児教育センター)に所属する同僚であり、調査は同センターにおいてフォーカス・グループ・インタビューで行った。日本での調査実施に際しては、調査協力者に調査内容を説明した上で同意を得た。収集したインタビュー・データの分析を通して、日米の保育者がまるで対話しているかのような多声的テキストの生成を試みた。

本研究は、一つの幼稚園 Web サイトの素材をめぐる語りであり、その例でもって日本の多様性を代表すると述べることはできない。但しそれは、たとえ何

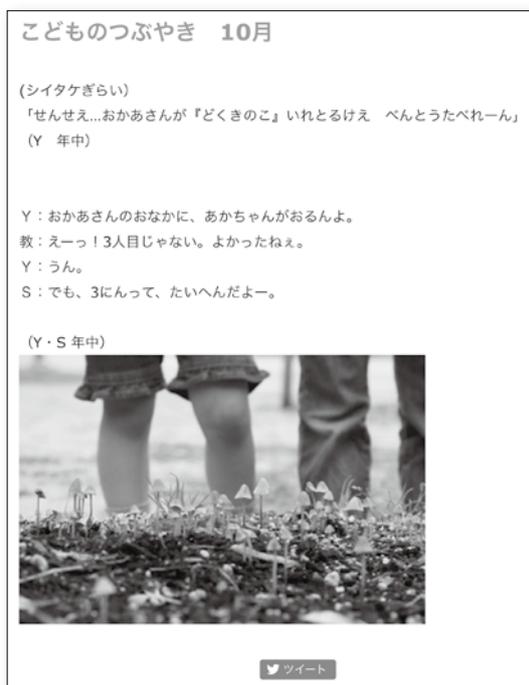


図 1: A 幼稚園の Web ページ

園の例を収集しようと同じである (Burke & Duncan 2015)。本研究の意義は、同じ幼稚園 Web サイトでも自国と異なる事象に接した米国の保育者にとって、それがどのような点で違和感なく捉えられ、どのような点で違和感を持って捉えられたのか、他方、そうした米国の保育者の解釈は日本の保育者にとって、どのような点で違和感なく捉えられ、どのような点で違和感を持って捉えられたのかを吟味することである。それによって私たちは、日米の保育者が潜在的に有する社会・文化的習慣や認識の一端を省みることができる。

## A 幼稚園の Web ページ「こどものつぶやき」

A 幼稚園の Web ページ「こどものつぶやき」とは、園や家庭などで発せられた彼（女）らの発話を紹介したものである。子どもたちの何気ない発想や想像を言葉にしたものが、大人にとって意外性を有していたり、気付きのきっかけになったりすることがある。A 幼稚園長によれば、自分自身が日頃感じている、子どもらしさとは異なる人間らしさや、特徴的なものの見方や捉え方を発信するために、印象的な「こどものつぶやき」を選択して掲載し、定期的に更新するのだという。以下、「こどものつぶやき」の一部を表 1 に、Web ページを図 1 に示す<sup>(注)</sup>。

表 1: A 幼稚園の Web サイトに掲載される「こどものつぶやき」の例

1	母：「お弁当に何入れてほしい？」 子：「...コップとはし」 Mother: "What do you want me to put in your lunch?" Child (first year / three years old): "am.... a cup and chopsticks"	(年少児 K)
2	(転入園の子を紹介) 担任：「新しいお友だちの〇〇くんです」 M：「みーちゃんたち、古いお友だちです」 (Introducing a new child) Teacher: "Class, this is our new friend 〇〇" Girl M (first year / three years old): "Hi, I am M, we are the old friends"	(年少児 M)
3	(きれいな雲) 子：「ママ、あれは神様がはしったあとだよ」 (Looking at beautiful cloud in the sky) Child (first year / three years old): Oh look, Mom! That must be the path where God went by!	(年少児 H)
4	(誕生日) 母：「誕生日おめでとう！4歳になったね！」 子：「3歳はどこいった？」 (Birthday) Parent: Happy birthday! Now you are four years old! Child (first year / three years old): Where did the third year go?	(年少児 K)